愛知学院大学心身科学部紀要第7号（23–31）（2011）

大学生における賞賛獲得欲求・拒否回避欲求と両親への社会的勢力認知との関連

三ツ村　美沙子*1)　高　木　浩　人*2)

本研究の目的は，大学生における2つの対照的な承認欲求，すなわち，賞賛獲得欲求，拒否回避欲求と，両親への社会的勢力認知の関連について検討することであった．重回帰分析によって，(a) 賞賛獲得欲求は父親への社会的勢力認知によって説明されること，(b) 拒否回避欲求は母親への社会的勢力認知によって説明されることが明らかとなった．さらにわれわれは，大学生と両親との間の親密さの程度が高いときにこれらの関連が強まるという調整効果を見出した．今後の研究への含意が議論された．

キーワード：社会的勢力，賞賛獲得欲求，拒否回避欲求

問　題

本研究の目的は，大学生における賞賛獲得欲求・拒否回避欲求と両親への社会的勢力認知との関連について検討することである．青年期は自分が他者からどう見られているかということを特に気にしやすい時期であり，そこには「他者からこう思われたい」，「自分をこう見せたい」といった願望，欲求が少なからず存在するだろう．他者に自分をどう見せたいかは人によってさまざまである．しかし，その違いは一体どこから来るのだろうか．

賞賛獲得欲求・拒否回避欲求

人は対人場面において，他者に与える自己のイメージを操作するために自己の行動をコントロールしようとする．このことは自己呈示（self-presentation）と呼ばれるが，菅原（1986）は公的自意識の強い人の特徴として，他者に対して積極的な自己イメージ，あるいは消極的な自己イメージを与えようといった2つの対立的な自己呈示の目標をもっているのではないかと指摘している．公的自意識（public self-consciousness）とは自己の外的・対人的側面に注意を向ける傾向のことであり，菅原（1986）はこのような自己呈示の仕方を方向づける要因として，「他者から賞賛され，好かれたい欲求」と「他者から嘲笑されたり，拒否されたくない欲求」の2つの承認欲求の存在を想定し，両欲求を測定する尺度を作成した．その後，小島・太田・菅原（2003）は菅原（1986）の尺度を改良し，賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度を作成した．両欲求は独立性の高いものであることが示されている（菅原，1986；小島ら，2003）．また両欲求は公的自意識と正の相関関係にあり，一般的に公的自意識の強い人はこの2つの欲求に関しても強い傾向にあることが確認されている（菅原，1986）．この2つの承認欲求に関しては，これまで多くの研究がなされてきた．菅原（1986）では，公的自意識に関連するパーソナリティである自己顕示的傾向の背後に賞賛獲得欲求が，対人恐怖的傾向の背後に拒否回避欲求の存在が示唆された．また，本田・鈴木（2007）は，両欲求が個人特性としてある程度安定的であるということを見出している．

自己呈示は他者の目が気になりやすい青年期において特に重要であると考えられ，大学生を対象に自己呈示の方向を左右する2つの対照的な承認欲求を扱うことの意味は大きい．人間の安定的な個人特性がどのよ

＊1）愛知学院大学大学院心身科学研究科心理学専攻博士前期課程
＊2）愛知学院大学心身科学部心理学科
（連絡先）〒470–0195　愛知県日進市岩崎町阿良池12　E-mail: misako.mitsumura@gmail.com

うに形成されていくのかを検討する際に，その個人の成長過程における他者からの影響に着目することは重要であろう．他者からの影響に関する概念は様々あるが，親子という関係は極めて持続的であり，また親は青年期の子どもに対して大きな影響力を保持していると考えられる．そのような影響力を説明する概念として社会的勢力（social power）がある．

社会的勢力

社会的勢力とは，「ほかの人の行動，考え，感情などを自分の望むように変えることのできる能力」（今井，1996，p. 56）と定義され，影響者と被影響者の間に存在する多少とも持続的な勢力関係における影響力を指す（French & Raven, 1959, p. 152）．French & Raven（1959）はこの社会的勢力について，報酬勢力（reward power），強制勢力（coercive power），正当勢力（legitimate power），参照勢力（referent power），専門勢力（expert power）の5つの基礎を提唱している．

報酬勢力とは，報酬を与える能力を基礎にした勢力であり，すなわち影響者から報酬がもらえるという被影響者の認知によって生じる影響力である．何が報酬になるのかは人それぞれであるが，一般的には金銭や物品，精神的な励ましや褒めることなどが挙げられる（今井，1996，p. 63）．次に，強制勢力は罰を与える能力を基礎とする勢力であり，従わなければ罰を与えられるのではないかという被影響者の予測によって生じる．罰としては身体的・精神的苦痛，被影響者が現在もっているもの（金銭，物品，地位など）を剥奪することなどがある（今井，1996，p. 65）．

正当勢力とは，社会的・文化的規範を基礎とする勢力で，影響者が自分に影響力を行使する正当な権利があり，それに自分が従わなければならないという規範を被影響者が内在化していることによって生じる．参照勢力は，被影響者が自分と影響者を同一視（identification）することに基づく勢力で，ここでの同一視とは，被影響者が影響者のようになりたいという気持ちのことである．専門勢力は，影響者のもつ専門的知識を基礎とする勢力で，影響者が人よりも豊富な専門的知識や技能を身につけているという被影響者の認知によって生じるものである．

日本では，今井（1986）がFrench & Raven（1959）の提唱した従来の社会的勢力の5分類に加えて，影響者のもつ魅力や影響者との対人関係を維持していきたい欲求を基礎とする魅力勢力（attraction power）を提唱している．

本研究の目的

親との関わりが子どもの発達にとって大きな影響を及ぼすことはすでに知られている。本研究では親の影響力の1つの側面である社会的勢力を子どもがどのように認知しているか，すなわち子どもの両親に対する社会的勢力認知と，2つの承認欲求という個人特性の形成との関連について検討を行う．なお，両親の勢力については今井（1986）が大学生を対象に調査を行っており，両親も社会的勢力の影響者として想定しうる存在として扱われてきている．

本研究では社会的勢力と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との間に関連を予測するが，さらにその関連に影響を及ぼす変数を2つ想定する．その2つとは，親との心理的な距離と物理的な距離である．心理的な距離として，本研究では子どもの親に対する感情や態度を扱う．親に対して良い感情を抱いていれば，親の勢力はその子どもにとってより重要なものとなるため，欲求への影響は大きくなる．しかし，親に対してあまり良い感情を抱いていなければ，親の勢力を重要視する必要がなく，欲求への影響は小さくなるとの予測が成り立つ．親に対する態度として，本研究では「親和性（affiliation）」を取り上げる．これは他者に対して好意をよせ，愛情的なきずなを強く感じている程度のことである（森下，1979）．親に好意を寄せていればいるほど，より親の勢力が影響力をもち，承認欲求との関連を強めると予測できる．

親和性が親との心理的な距離を示すのに対し，今回扱うもう1つの変数は，親と同居しているかしていないかという物理的な距離である．大学進学を機に両親のもとから離れて一人暮らしをする学生は少なくない．親との物理的距離は社会的勢力認知と2つの承認欲求との関連にどのような影響を及ぼすのだろうか．一般的には同居しているほうが親は勢力を行使しやすく，子どもも勢力を認知しやすいだろうと考えられる．そのことから，両親と同居している人のほうがしていない人よりも勢力認知と承認欲求との関連が強まることが予想される．

したがって本研究では，親に対する親和性と，親と同居しているか否かを社会的勢力認知と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との間に作用する調整変数として位置づけ，検討を行う．

方　法

調査対象

総合大学（一校）に所属する大学生199名（男性103名, 女性95名, 不明１名）．平均年齢は18.76歳（18～23歳，SD＝0.81）であった．

質問紙の構成

個人属性：性別，学年，年齢，両親と現在同居しているか否か（「している」,「父のみとしている」,「母のみとしている」,「していない」), 両親の就労形態(「二人とも働いている」,「父のみ働いている」,「母のみ働いている」,「働いていない」）について回答を求めた．なお，両親の就労形態は今回の分析では扱わない．

社会的勢力認知：被影響者が影響者の社会的勢力をどのように認知しているか測定するために今井(1996)の社会的勢力認知尺度を用いた．「報酬勢力」,「強制勢力」,「正当勢力」,「専門勢力」,「参照勢力」,「魅力勢力」の６つの下位尺度からなる．本来は各尺度４項目ずつの計24項目であるが，参照勢力と魅力勢力は類似の概念であると考えられるため，今回は French & Raven（1959）の分類に基づいて魅力勢力を除いた５つの勢力認知を測定した．父親と母親それぞれの勢力について回答を求め，評定は「１．全くそう思わない」から「７．非常にそう思う」の７件法で行った．

賞賛獲得欲求・拒否回避欲求：小島ら（2003）の賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度を用いた．各欲求９項目ずつの計18項目からなる尺度であるが，本研究では調査参加者の負担軽減のため小島ら（2003）で各欲求に因子負荷量の値が高かった上位５項目を抜粋して使用した．評定は「１．あてはまらない」から「５．あてはまる」の５件法で行った．

両親に対する心理的距離：子どもが認知している両親への心理的距離を測定するため森下（1981）の子どもの親に対する親和性尺度を用いた．「親密さ尺度」７項目,「同一視欲求尺度」６項目,「信頼性尺度」４項目の計17項目からなる．小・中学生を対象に作成されているため，今回は大学生用に表現を多少修正した．また，参照勢力と測定内容が類似している同一視欲求ついては質問項目から除外した．社会的勢力認知尺度と同様に父母それぞれへの親和性について回答を求め，評定は「１．あてはまらない」から「５．あてはまる」の５件法で行った．

手続き

調査は2010年10月１日，教養科目の心理学の授業開始時に質問紙を配布して回答を求め，その場で回収した．

結　果

信頼性分析

各尺度において Cronbach の α 係数を算出したところ，社会的勢力認知尺度では父親の報酬勢力（以下，父報酬）が α＝.809，強制勢力（父強制）が α＝.626，正当勢力（父正当）が α＝.566，専門勢力（父専門）が α＝.645，参照勢力（父参照）が α＝.801，母親の報酬勢力（母報酬）が α＝.787，強制勢力（母強制）が α＝.668，正当勢力（母正当）が α＝.655，専門勢力（母専門）が α＝.737，参照勢力（母参照）が α＝.773であった．父正当の値は十分ではないが，重要な因子であるためこのまま分析に用いることにした．

賞賛獲得欲求（賞賛獲得）は α＝.783，拒否回避欲求（拒否回避）は α＝.847であり，こちらは十分な内的整合性を得られた．

親に対する親和性尺度では, 父親に対する親密さ(父親密）が α＝.885，信頼性が α＝.620，母親に対する親密さ（母親密）が α＝.863，信頼性が α＝.576であった．母親に対する信頼性因子の値が低かったため，今回は分析から信頼性因子を除外し，両親に対する心理的距離として親密さ因子のみを扱うこととした．

相関分析

各因子の平均値，標準偏差，相関係数を示したのが表１である．賞賛獲得欲求とは父正当（r＝.236, p＜.01），父参照（r＝.181, p＜.05），母正当（r＝.161, p＜.05）が有意な正の相関を示した．一方，拒否回避欲求とは父正当（r＝.196, p＜.01），父参照（r＝.175, p＜.05），母報酬（r＝.204, p＜.01），母正当（r＝.195, p＜.01），母専門（r＝.224, p＜.01）が有意な正の相関を示した．

社会的勢力認知と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連

両親に対する社会的勢力認知と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連について検討するため，両親への社会的勢力認知を説明変数，各欲求を目的変数とする重回帰分析（強制投入）を行った．その結果を示したのが表２，表３である．

表1　承認欲求，両親への社会的勢力認知と親密さとの相関係数

	平均値	標準偏差	賞賛獲得	拒否回避	父報酬	父強制	父正当	父専門	父参照	母報酬	母強制	母正当	母専門	母参照	父親密	母親密
賞賛獲得	13.40	4.09	α=.783	.037	.075	.068	.236**	.074	.181*	.002	−.014	.161*	−.042	−.005	.167*	.155*
拒否回避	16.63	4.77		α=.847	.097	.093	.196**	.117	.175*	.204**	.076	.195**	.224**	.016	.150*	.121 †
父報酬	4.47	1.28			α=.809	−.255***	.510***	.501***	.722***	.436***	−.017	.298***	.275***	.401***	.729***	.423***
父強制	3.38	1.20				α=.626	.178*	−.161*	−.128 †	.003	.358***	.201**	.038	.015	−.323***	−.070
父正当	3.64	1.10					α=.566	.473***	.481***	.314***	.138 †	.646***	.259***	.254**	.390***	.331***
父専門	3.93	1.24						α=.645	.579***	.409***	−.057	.321***	.319***	.413***	.473***	.373***
父参照	3.69	1.32							α=.801	.367***	.053	.302***	.393***	.486***	.711***	.442***
母報酬	4.98	1.13								α=.787	−.184*	.436***	.453***	.619***	.184*	.726***
母強制	3.54	1.19									α=.668	.126 †	.302***	−.087	.045	−.262***
母正当	3.91	1.11										α=.655	.442***	.368***	.247**	.454***
母専門	3.93	1.03											α=.737	.488***	.284***	.432***
母参照	4.07	1.24												α=.773	.271***	.613***
父親密	3.17	.86													α=.885	.438***
母親密	3.53	.72														α=.863

† $p<.10$, *$p<.05$, **$p<.01$, ***$p<.001$

表2　父親の勢力を説明変数とする重回帰分析

	賞賛獲得	拒否回避
父報酬	−.159	−.048
父強制	−.002	.083
父正当	.229*	.168 †
父専門	−.107	−.033
父参照	.234 †	.152
R^2	.069*	.062 †
自由度調整済み R^2	.041	.033

† $p<.10$, *$p<.05$

表3　母親の勢力を説明変数とする重回帰分析

	賞賛獲得	拒否回避
母報酬	−.060	.309**
母強制	−.029	.087
母正当	.243**	.089
母専門	−.124	.145
母参照	−.004	−.266**
R^2	.047	.126***
自由度調整済み R^2	.019	.100

**$p<.01$, ***$p<.001$

父親の勢力を説明変数，賞賛獲得欲求を目的変数とした場合，R^2は.069で有意であり（$F(5,164)=2.442$, $p<.05$），父正当（$\beta=.229$, $p<.05$）が有意な正の関連を示し，父参照（$\beta=.234$, $p<.06$）が正の関連の傾向を示していた．つまり，父親に対する正当勢力の認知が強いほど賞賛獲得欲求も高く，参照勢力の認知が強いほど賞賛獲得欲求も高い傾向があることがわかった．拒否回避欲求を目的変数とした場合，R^2は.062で傾向は示していたが有意ではなかった（$F(5,161)=2.134$, $p<.07$）．

母親の勢力を説明変数，賞賛獲得欲求を目的変数とした場合，R^2は.047で有意ではなかった（$F(5,173)=1.703$, *n.s.*）．拒否回避欲求を目的変数とした場合は，R^2は.126で有意であり（$F(5,169)=4.858$, $p<.001$），母報酬（$\beta=.309$, $p<.01$）が有意な正の関連を示し，母参照（$\beta=-.266$, $p<.01$）が有意な負の関連を示した．つまり，母親に対する報酬勢力の認知が強いほど拒否回避欲求は高く，参照勢力の認知が強いほど拒否回避欲求が低いことがわかった．

以上のことから，賞賛獲得欲求には特に父親の勢力が，拒否回避欲求には特に母親の勢力が関連していることが明らかとなった．

勢力認知と両欲求との関連：親密さの高低による違い

まず，父親に対する親密さ得点の平均値によって低群（90名），高群（103名）に分け，それぞれ先ほどと同様の重回帰分析を行った．その結果を示したのが表4である．

親密さ低群では，目的変数が賞賛獲得欲求の場合R^2は.104（$F(5,73)=1.690$, *n.s.*），拒否回避欲求の場合R^2は.048（$F(5,71)=.711$, *n.s.*）であり，ともに有意な結果は得られなかった．一方親密さ高群では，賞賛獲得欲求を目的変数とした場合，R^2は.132で有意であり（$F(5,83)=2.531$, $p<.05$），父参照（$\beta=.291$, $p<.05$）が有意な正の関連を示していた．つまり，父親の参照勢力認知が強いほど賞賛獲得欲求が高いことがわかっ

表4　父親の勢力を説明変数とする重回帰分析：親密さの調整効果

	親密さ低群		親密さ高群	
	賞賛獲得	拒否回避	賞賛獲得	拒否回避
父報酬	−.290 †	−.097	.046	−.024
父強制	−.136	.136	.175	.066
父正当	.389*	.117	.072	.218 †
父専門	−.018	−.110	−.142	.006
父参照	−.017	.099	.291*	.111
R^2	.104	.048	.132*	.079
自由度調整済み R^2	.042	.019	.080	.023

† $p<.10$, *$p<.05$

表5　母親の勢力を説明変数とする重回帰分析：親密さの調整効果

	親密さ低群		親密さ高群	
	賞賛獲得	拒否回避	賞賛獲得	拒否回避
母報酬	−.220	.316*	−.018	.214 †
母強制	−.062	.055	.075	.100
母正当	.239 †	−.023	.178	.167
母専門	.123	−.065	−.236 †	.152
母参照	−.171	.115	−.010	−.389**
R^2	.083	.119 †	.060	.207**
自由度調整済み R^2	.021	.060	.008	.162

† $p<.10$, *$p<.05$, **$p<.01$

た．拒否回避欲求を目的変数とした場合，R^2は.079で有意ではなかった（$F(5,82)=1.416$, *n.s.*）．

次に，母親においても親密さ得点の平均値によって低群（87名），高群（108名）に分け，同様の分析を行った．その結果を示したのが表5である．

親密さ低群では，目的変数が賞賛獲得欲求の場合R^2は.083であり，有意な結果は得られなかった（$F(5,74)=1.337$, *n.s.*）．拒否回避欲求を目的変数とした場合，R^2は.119で傾向は示していたが（$F(5,75)=2.017$, $p<.09$）有意ではなかった．親密さ高群では，賞賛獲得欲求を目的変数とした場合，R^2は.060で有意ではなかった（$F(5,91)=1.164$, *n.s.*）．拒否回避欲求を目的変数とした場合，R^2は.207で有意であり（$F(5,88)=4.598$, $p<.01$），母参照（$\beta=-.389$, $p<.01$）が有意な負の関連を示し，母報酬（$\beta=.214$, $p<.07$）が正の関連の傾向を示していた．つまり，母親の参照勢力を強く認知するほど拒否回避欲求は低く，報酬勢力を強く認知するほど拒否回避欲求は高い傾向があることがわかった．

以上より，親密さ低群においては父母ともに有意な関連がみられず，親密さ高群において賞賛獲得欲求には父親の勢力が，拒否回避欲求には母親の勢力が関連していることが示された．つまり，社会的勢力認知と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連には親との親密さが調整変数として作用していることが明らかとなった．

勢力認知と両欲求との関連：両親との同居－非同居による違い

まず父親と同居している群（119名）と同居していない群（83名）に分け，同様の重回帰分析を行った．その結果を示したのが表6である．

同居群では，賞賛獲得欲求を目的変数とした場合R^2は.059で有意ではなかった（$F(5,98)=1.235$, *n.s.*）．拒否回避欲求の場合R^2は.062でこちらも有意ではなかった（$F(5,98)=1.295$, *n.s.*）．一方非同居群でも，目的変数が賞賛獲得欲求の場合R^2は.135で有意ではなく（$F(5,60)=1.868$, *n.s.*），拒否回避欲求の場合もR^2は.145で有意ではなかった（$F(5,57)=1.932$, *n.s.*）．

続いて母親と同居している群（128名）と同居していない群（71名）に関しても同様の分析を行った．その結果を示したのが表7である．

表6　父親の勢力を説明変数とする重回帰分析：同居－非同居の調整効果

	同居群		非同居群	
	賞賛獲得	拒否回避	賞賛獲得	拒否回避
父報酬	−.179	.044	−.144	−.210
父強制	−.049	.058	.037	.150
父正当	.244	.211 †	.237	.058
父専門	.024 †	−.124	−.278 †	.207
父参照	.114	.083	.340 †	.313
R^2	.059	.062	.135	.145
自由度調整済み R^2	.011	.014	.063	.070

† $p<.10$

表7　母親の勢力を説明変数とする重回帰分析：同居－非同居の調整効果

	同居群		非同居群	
	賞賛獲得	拒否回避	賞賛獲得	拒否回避
母報酬	−.057	.245*	.068	.374 †
母強制	.010	.089	.062	.083
母正当	.110	.086	.587***	.105
母専門	−.058	.119	−.467*	.212
母参照	−.030	−.268*	.021	−.196
R^2	.013	.092 †	.245**	.221*
自由度調整済み R^2	−.031	.051	.178	.147

† $p<.10$, *$p<.05$, **$p<.01$, ***$p<.001$

同居群では，賞賛獲得欲求が目的変数の場合 R^2 は .013 で有意ではなく（$F(5,111)=.300$, *n.s.*），拒否回避欲求の場合 R^2 は .092 で傾向は示していたものの有意ではなかった（$F(5,111)=2.246$, $p<.06$）．対して非同居群では，賞賛獲得欲求が目的変数の場合 R^2 は .245 で有意であり（$F(5,56)=3.637$, $p<.01$），母正当（$\beta=.587$, $p<.001$）が有意な正の関連を示し，母専門（$\beta=-.467$, $p<.05$）が有意な負の関連を示していた．つまり，母親の正当勢力を強く認知するほど賞賛獲得欲求は高く，専門勢力を強く認知するほど賞賛獲得欲求は低いことがわかった．目的変数を拒否回避欲求とした場合 R^2 は .221 で有意であり（$F(5,52)=2.958$, $p<.05$），母報酬（$\beta=.374$, $p<.07$）が有意傾向を示していた．つまり，母親の報酬勢力を強く認知するほど拒否回避欲求は高い傾向にあることがわかった．

以上より，父親に関しては同居群・非同居群ともに勢力と欲求の間に関連はみられなかったが，母親の場合は非同居群のみで勢力と各欲求との間に有意な関連がみられた．つまり，親に対する社会的勢力認知と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連において，父親と同居しているかいないかは調整変数として特に作用はしておらず，母親と同居しているかどうかのみが調整変数として作用していた．ただし，当初の予想とは逆方向の作用がみられた．

考　察

社会的勢力認知と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連

重回帰分析の結果，賞賛獲得欲求は主に父親の勢力と関連し，拒否回避欲求は主に母親の勢力と関連していることが明らかとなった．このことは子どもの安定的な個人特性に対する影響が父親と母親で異なることを示唆していると考えられる．

岡本（2004, p. 74）によると，Parsons（1955）は家族の機能として，主に父親の役割である道具的役割と主に母親の役割である表出的役割を挙げている．道具的役割とは家族と外部環境との間を調整するもので，訓練や統制，命令や賞罰等の執行者となり，子どもが自信をもって社会生活を営めるよう指導する役割であ

る．一方，表出的役割は家族メンバー間の感情的問題を調整するもので，愛情をもって子どもを育み，父親やきょうだい間の調整役を行うことで子どもの情緒的な安定を維持する役割である．また河合（1980, p. 28）は両親の役割として母性原理と父性原理という概念を提唱している．それによれば前者は「包含する」機能が主となっており，すべてを包み込み，すべての子どもを平等に扱う．それに対して後者は「切断する」機能的な特性をもっており，すべてのものを主体と客体，善と悪などに切断し，子どもを能力や個性に応じて類別する．

今回の結果は，父親と母親の役割に関するこれらの知見と整合しているものと考えられる．道具的役割や父性原理は，賞罰等を用いて子どもが自信をもって社会生活が営めるよう促し，子どもの能力や個性によって対応をする．このように道具的，父性的に接されてきた子どもは，賞賛されることで自分に自信をもつようになるだろう．そして，賞賛を得ることに価値を見出すようになり，賞賛獲得欲求が強く影響を受けると考えられる．なお，河合（1980, p. 27）によれば，父親は社会規範の体現者であり，子どもが規範を守る限り父親はそれを賞するとされている．父親の勢力の中でもとりわけ，社会的・文化的規範に基づく正当勢力が賞賛獲得欲求と関連していたことはこの知見と一致する．

対して表出的役割や母性原理は，愛情をもって子どもを優しく包み込み，家族のメンバー間を取りもつことで子どもの情緒的安定を図る．このように表出的，母性的に接されてきた子どもは，母親との親密で安定した関係によって安心感を得ると考えられ，また母親以外の他者とも安定した良い関係を築きたいと思うようになるであろう．しかし，関係を保持したい際に悪い自己イメージをその他者に与えてしまうと，築いた良い関係も悪くなってしまう可能性がある．他者との関係が不安定になることは，その子どもの情緒が不安定になることを意味すると考えられ，他者から嫌われることを避けたいという拒否回避欲求が強く影響を受けるのではないだろうか．

さらに今回，母親の勢力の中でも特に報酬勢力が欲求と正の関連を，参照勢力が負の関連を示していた．母親の参照勢力を強く認知している子どもは母親と情緒的な強い繋がりをもっていると考えられ，よって子どもの情緒は安定し，拒否回避欲求は高まらないのであろう．一方，報酬勢力を認知することで拒否回避欲求が高まるのは一見解釈が困難であるが，報酬を得るためにはまず嫌われてはならず，積極的に自己をアピールするというよりは，いわゆる「良い子」のイメージを呈示したいという消極的な自己呈示目標が生まれるためであると考えられる．

勢力認知と両欲求との関連：親密さの高低による違い

本研究では，社会的勢力と 2 つの承認欲求との関連に影響を及ぼす調整変数の 1 つとして親との親密さを取り上げ，分析を行った．その結果，親密さ低群では父母ともに有意な関連はみられず，親密さ高群において父親の勢力が賞賛獲得欲求と，母親の勢力が拒否回避欲求と有意な関連があることがわかった．このことは親に対する親密さが勢力と欲求との間に作用する調整変数であることを示しており，親との心理的距離が親の勢力を重視するかどうかに影響を及ぼし，結果的に欲求の強さと関連すると考えられる．

勢力認知と両欲求との関連：両親との同居－非同居による違い

本研究では，親との物理的距離である同居－非同居をもう 1 つの調整変数として位置づけ，分析を行った．その結果，父親との同居－非同居は調整変数としては作用せず，母親との同居－非同居のみが調整変数として作用していることがわかった．また，母親と同居している場合は勢力と欲求との間に有意な関連はみられず，同居していない場合においてのみ有意な関連がみられるという，当初の予測とは逆の結果がみられた．この結果については 3 つの可能性が考えられる．

まず 1 つは，母親との物理的距離が近いよりも遠い方が母親の勢力と欲求との関連が強まるという可能性である．先述の通り，母親には子どもの情緒的安定を図る役割が存在する．母親と物理的距離が離れれば子どもの情緒は不安定になることが予想されるが，母親を自己に内在化することで情緒の安定を保っていることが考えられる．そして母親を内在化することで母親の近くにいるよりも勢力と欲求との関連に強い影響を及ぼしたのではないだろうか．

2 つめに，想定していた因果が実際は逆であった可能性が考えられる．つまり，物理的距離が近いから母親の勢力の影響が強くなるのではなく，母親の勢力の影響が強いためにそこから逃れたいと感じ，母親の元を離れることを選択しているとも考えられるのではないだろうか．

3 つめは，調整変数として物理的距離を取り上げることが不適切であった可能性である．たとえば親元を

離れたのが大学進学時であった場合，非同居の期間はまだ短く，勢力認知と欲求の関連に影響を及ぼす変数とはなりえていないことが考えられる．いずれにせよ，親の勢力と承認欲求との関連に作用する変数としての親との物理的距離については未知な部分が多く，今後の研究を深めていく必要があるだろう．

本研究の意義

本研究では，両親の勢力と賞賛獲得欲求，拒否回避欲求との関連について検討した．その結果，父親からの社会的勢力は賞賛獲得欲求と，母親からの社会的勢力は拒否回避欲求と関連していることが明らかとなった．青年期において重要な意味をもつ2つの承認欲求が親の社会的認知と関わっており，しかも賞賛獲得欲求は父親，拒否回避欲求は母親の社会的勢力と関連していることが見出されたことは非常に興味深い．また，親との親密さが調整変数として作用しており，大学生において家族との関係のありようが，きわめて重要な意味をもっていることを示すことができた．

今後の課題

最後に，本研究の課題について3点指摘しておきたい．

一般化の可能性：本研究ではデータ収集の際，1校の大学のみで質問紙調査を行った．したがって，今回の結果をどれだけ一般化できるかは判断が難しい．より幅広いサンプルを対象に同様の調査を行う必要がある．また，中学生，高校生といった，さらに親の勢力の影響を強く受けやすいと考えられる対象についても検討を行う必要があるだろう．

参照勢力と親密さの弁別性：本研究では親の社会的勢力と子どもの承認欲求との間に作用する変数として親との親密さを取り上げ，検討を行った．しかしこの変数は，社会的勢力の下位尺度である参照勢力との間に強い関連が見られている（表1参照）．今後慎重に取り扱わなければならない問題である．

因果関係：本研究では親からの社会的勢力が子どもの賞賛獲得欲求・拒否回避欲求に影響を及ぼすと考えているが，両者の因果関係が明確に示されたわけではない．なぜなら，承認欲求の高低が親の勢力の認知のしかたに影響を与えているという解釈も否定できないからである．今後，縦断的研究も含めて，さらに検討を進めていくことが必要であろう．

引用文献

French, J. R. P., Jr. & Raven, B. H. (1959). The bases of social power. In D. Cartwright (Ed.) *Studies in social power.* MI: Institute for Social Research. 150–167.

本田周二・鈴木公啓（2007）．賞賛獲得欲求と拒否回避欲求はどのくらい安定しているか？　日本パーソナリティ心理学会第16回大会発表論文集，160–161.

堀洋道・山本真理子・松井豊（1996）．心理尺度ファイル—人間と社会を測る—　垣内出版，354–357.

今井芳昭（1986）．親子関係における社会的勢力の基盤　社会心理学研究，1, 35–41.

今井芳昭（1996）．影響力を解剖する —依頼と説得の心理学—　福村出版.

河合隼雄（1980）．家族関係を考える　講談社.

小島弥生・太田恵子・菅原健介（2003）．賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み　性格心理学研究，11, 86–98.

森下正康（1979）．子どもの親に対する親和性と親子間の価値観および性格の類似性　心理学研究，50, 145–152.

森下正康（1981）．児童の親に対する親和性の因子構造と尺度の作成　和歌山心理研究会（藤田紹憲先生退官記念誌），57–72.（堀・山本・松井，1996より引用）

岡本祐子（2004）．家族関係　子安増生・二宮克美（編）キーワードコレクション発達心理学［改訂版］　新曜社，74–77.

Parsons, T. (1955). Family structures and the socialization of the child. In T. Parsons & R. F. Bales (Eds.) *Family, socialization and the interaction process.* New York: Free Press.（岡本，2004より引用）

菅原健介（1986）．賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求 —公的自意識の強い人に見られる2つの欲求について—　心理学研究，57, 134–140.

最終版平成23年7月29日受理

Bulletin of The Faculty of Psychological & Physical Science, No. 7, 23–31, 2011

The Relationship of Praise Seeking, Rejection Avoidance Needs of Undergraduate Students and Perceived Social Power from Parents

Misako MITSUMURA, Hiroto TAKAGI

Abstract

The purpose of this study was to examine the relationship of two contrasting approval needs, namely, praise seeking and rejection avoidance needs of undergraduate students and perceived social power from their parents. Regression analysis revealed, (a) praise seeking need was explained by perceived social power from father and, (b) rejection avoidance need was explained by perceived social power from mother. Further, we also found that the level of affiliation between students and their parents moderated these relationships such as the relationships were strong when the level of affiliation was high. Implications for future research were discussed.

Keywords: social power, praise seeking needs, rejection avoidance needs